

万葉集に於ける訓法について

—特に訓添えの面から—

三 島 富美子

(一) 漢字漢文を駆使して書かれた万葉集は、一字一音式の他に、少ない字数で多くを表現しようとする巻も亦多く存在する。そしてそれらの歌には、歌の根底の意を表わす文字は表記されても、その歌を左右する助詞、助動詞等は比較的表記省略され易いという特色がある。又、表記者はその表記傾向に特長を示し、表記省略の多少、一定文字、言葉の使用等へと様々である。しかし乍ら、これら一連の傾向に一貫しているのは、当時の表現法・構文法が各々の理解の上に確実に把握されているという事実であろうか。慣用句、呼応関係等…。例えそれらが表記省略の形であらわれていても、当然訓添えずべく考えられ、何ら支障のあるべき問題ではなかつたのである。

(A) 無暇人之眉根乎徒令搔乍不相妹可聞(四・五六二)
この歌の第四句は、諸註釈書のほとんどがカカシメツツモと、モを補読して訓んでいるが、新校と全註釈は、カカシメニツツと、助動詞ニを補読している。特に全註釈は、

ニツツの例として卷十・二〇七六の「烏珠之スバタマノ夜者開爾ヨハアケケルツツ乍」を掲げて説明している。しかし「注釈」にも言うように、夜が明けてしまおうとしているからこそ完了二があつて然るべきだろうが、問題歌は眉根を搔く動作の連続状態を表わしているのです。その点からも妥当な訓とは言えない。

そこで乍にモが補読されるかについては

(イ) 此崗草苺小子勿然苺有乍アリツツモ君来座御写草為(七・三九二)

(ロ) 雲灼灼発意追見乍有及直相(ミツツモケアラム) (十一・二四五二)

の如き例も存在し、

(ハ) 未玉之年月兼而烏玉乃夢爾所立見君之容儀者(イメニソシメユル) (三・三九英)

(ニ) 風不吹浦爾浪立無名乎吾者負香逢者無二(ナキナラフモ) (十・三七六)
の如き例も存在するからして、蜂矢氏の「読添へは借音表記とは共存し得ない」という説は必ずしも正鵠を得ているとは言われず、やはりここは、当然モを補読してカカシメツツモと施訓するのが自然ではないか。加之、集中モ：カモの呼応関係の例は数多く存在し、

五十殿寸薄寸眉根乎徒令搔管不相人可母(カカシメツツモ) (三・三九三)

の好傍証例に比べれば、文句なく、詠嘆をふまえたモーカモの呼応関係で解決されるという事ができるのである。

(B) 昨日見而今日社間吾妹兒之幾許継乎見卷欲毛

(十一・二五五九)

この歌の結句の訓は、現在、①ミマクホシキモと、②ミ

マクホシモの二説に代表されていると言える。これについて①説の沢潟博士は「注釈」で『「卷」の借訓仮名の下に助詞を訓添へた例はなく(中略)シを訓むならば之があつたと見ねばならぬ。それにホシと終止形で結ぶには上のガが問題になる(中略)そこで佐伯君(「万葉語研究」三〇頁)はガ:ホシキと訓むのであるが、このガは下を連体形でうける為のものでなく「吾妹子」の上に「何しかも」などいふ語が略されたものと見る、と言はれるのである』と述べられ詳しい説であるとされる。しかし私は、集中の諸例から推して、やはり②説に従うべきだと思ふ。集中ク語法十モの形をとつている例は

〔A〕 (イ) 天原 門度光見良久之好藻(六・九八三)

(ロ) 児呂我可奈門欲由可久之要思毛(十四・三五三〇)

〔B〕 (イ) 妹之光儀乎見卷苦流思母(二・二二九)

(ロ) 桜花未見爾散卷惜裳(十・一八七〇)

等々で、〔A〕は強意シを書添え、〔B〕は助動詞ムのク語法が動詞に接続する事によつて定数音となつている形であり、共にモは形容詞の終止に接続している。〔A〕〔B〕ともに数多く存在しているところから、ク語法+(シ)+形容詞の終止形+モの形は一種の慣用句ではないかと思はれこれによつても、問題歌「見卷欲毛」は、当然ミマクシホシモと訓むべきであろう。尚、借訓仮名の下の訓添えについての懸念は、借訓仮名はおろか、無名乎、吾者負香(十

一・二七二六)の如く、字音仮名「乎」の下でさえ、モが補読される確例が存在する事からも一応解消されるものと思ふ。

ところで、「吾妹子之」の之は、ホシと終止で結ぶに當つて、ワギモコハと訓んではどうだろうか。経伝釈詞に者、猶「諸也」又、「諸之也」とあつて、之者は漢文の助辞として共通して用いられており、他にも

(イ) 梓弓春山近家居之続而聞良牟鶯之音(十・一八二九)

(ロ) 求跡曾君之不来益捨登曾公者不来益(十三・三六)

(ハ) 亦使何神之吉。亦遣葛神之者吉。(神代記)

(ニ) 昔者聞三分后今之見二吉賓一(懷風藻)

等、確例は多い。就中、問題を招くがホシより、言外に逆接の意味を含む上句のコソの存在は、わざわざ「何しか」を補ふ必要はないと言えるのではないだろうか。

要するに、「しきりに会いたい」という気持が、感情的な強調によつて表わされていると言え、コソ:ハ:シホシモの関係が一層、素直に受け入れられると思ふのである。

以上、二つの場合について概観してみたが、このような表現法は、当時の一種の法則とも見られるもので、集中、様々の形で存在している。本稿ではそのような問題を二・三取り上げ、訓添え、改訓によつて考察してみようと思ふ。

(1) モーカの形 (二)

藤浪咲春野爾蔓葛下夜之恋者久雲在 (十・一九〇一)

右の歌の結句は、従来、諸註釈書のほとんどが、ヒサシクモアラムと訓んでおり、格別の疑問を持たれた事は無い。しかし集中十六例もあるモアラムの形について、改めて調べると凡そ二つの型に分けられる事が分る

まず第一の型は

(イ) 己能許呂波 古非都追母安良牟 (十五・三七二六)

に代表される如く、「…でしよう」^{〔がしかし〕}と、推量の意で終つても、句中、又は言外に逆接的な意を含んでゐる類で、ほとんどがこの型に属してゐる。第二の型は

(ロ) 伊能知安良婆 安布母安許登良牟 (十五・三七四三)

の様に「…でしよう、ですから…」と順接的に原因を導いてゐる類、即ち表面の意とその反対の意が同時に列挙して推量される形で、三例ともコトモアラムという形をとる類である。そこで、この二型に、当面の問題歌を照応させてみると、意味上から、結局、そのどちらにも当てはめ難いと言えそうなのであるとなると、モアラムと訓み得る事はあつても意味の上から、その訓も、もつと別の角度から考えられていいのではなからうか。

ここで、「久雲在」の久と雲は写本の異同もなく、久を乏の誤りだとする新考の説も根拠が薄いので、久、雲はそ

のままヒサシクモと訓んでいいと思われ、結局、問題は在の訓にあると考へたい。

そこで「ヒサシクモ……」とあるところから形容詞に助詞モが接続する例を調べると、

(イ) 苦毛零来雨可神之崎 (三・二六五)

(ロ) 鷹鳴乃孀呼音乃乏蜘蛛在寸 (八・一五六二)

(ハ) 为声蜂音石花蜘蛛荒鹿異母二不相而 (十二・二九九)

(ニ) 宇礼多久母那久那留登理鹿 (古事記・上)

等々、枚挙に遑がなく、いづれも、助詞カと呼応している点で(いわゆるモーカ)一致している。この呼応は、単に形容詞+モの形のみならず種々の品詞にでも数多く見られる事からしても、モーカは常用された構文法である事が推察できると思う。そして、強意の詠嘆、感動の意をふまえる事により、一首のしめくり的役割をも果しているのである。こう考へてくると、「久雲在」をモーカに照応させて、ヒサシクモアルカと訓む事に大して抵抗は感じられな

いだらう、集中、

(イ) 黄葉乃移伊去者悲爽有香 (三・四五九)

(ロ) 独念爾吾念者惑毛安流香 (四・七一七)

(ハ) 比加里乎見礼婆多敷刀久母安流香 (十七・三九二三)

(ニ) 等母邇斯都米波多怒斯久母阿流迦 (記・下)

の如く、モアルカが形容詞に接続した好例の存在が多い事からしても、最も妥当な訓と言へるのである。

さて、結句が改訓されると、次に懸念されるのは第四句「下夜之恋者」の訓であろう。ほとんどの註釈書はシタヨシコヒバと訓んでいるのであるが、ヒサシクモアルカは、過去から現在への時間の経過に対する作者の詠嘆の意であるからして、仮定法コヒバは、その意味でもモアルカには接続しえない。ただ、「恋」字は、寛、改に名詞で訓まれているが葛は延う動作を、過去から未来へと続けているのであり、シタヨの助詞ヨが動作、作用の起点を示す機能を持つ事等からも「恋」は当然動詞に訓むべきものである。

さてそうなれば、「恋者」に対する可能な訓には、コフルハとコフレバの二つが考えられる。前述した形容詞十モアルカの用例から見ると、モアルカに続く上の句は、ほとんどが動詞の已然形十バの形をとつているので、それに倣つてコフレバとし、「心の底で恋うので」という意に解してもよさそうだが、それよりコフルハと訓んで、「心の底ではかりこんなに恋い慕うのは、恋が成就するには久しくもまあかかる事だなあ。」という意に解した方が、より歌のイメージに即した訓義とは言えないだろうか。その上、下夜之恋者の之を訓むと、四、五句とも八、八音になるところから、この場合、之字は不読文字として考えられはしまいか。集中、之字を不読文字としている例は、

- (1) 其故為便知之也音耳母名耳毛不絶(ヒムスベシヤ) (三、一六長歌)

- (ロ) ハルサレバ 春之在者妻乎求等 (十・一八二六) 他二例
シタヨシコヒバ 天霧之雪毛零奴可 (八・一六四三) 他二例
イニアル 家爾有之櫃爾鏤刺藏而師 (十六、三八一六)
 等、九例見られ、日本書紀にも

- (1) 两国使入望胆之愕然(トモタリ) (推古紀)
 乃勝鳥養(カテカヒ) 新羅送使等従之 (舒明紀)

等、助詞、助動詞十之の場合の虚字の例は、枚挙に遑がない。そして、集中九例のうち五例が問題歌と同じく卷十に存在し、之字と同じ罽、也、者等の漢文の助辞がおき字としてやはり卷十に多く存在するという事実は、問題歌之が虚字と見られる裏づけを濃くするものだと言えるのである。加之、

- (1) 隠沼(シタヨコフレバ) 從裏恋者無之妹名告己物乎 (十一・二四四一)

(ロ) 隠沼乃下爾(シタヨコフレバ) 恋者飽不足人爾語都可忌物乎 (七・三七九) の、強意シを含まない発想の類似例の存在は右の事実を一層明確にするものであろう。

以上の事から、問題歌の四、五句はシタヨコフルハヒサシクモアルカと訓む事により、作者の哀感と情熱とが程よく交錯してモアルカの詠嘆的イメージが生かされると思うのである。

- (2) ク語法十モ十形容詞の形

吾妹子不相久馬下乃阿倍橘乃羅生左右 (十一・三七五)
 この歌の第二句の訓を諸註釈によると、古写、刊本には

①アハデヒサシモと、不相をアハズテの融合縮約形に訓んでゐるが、他のほとんどは②アハズヒサシモ説をとり、大系のみ③アハナクヒサシと訓んでゐる。このうち①の、ズシテ、ズテの融合形は、平安期成立の語である為、当然問題外である。次に、

東市之殖木乃木足左右不相久美宇倍恋爾家利 (三、三一)

○)

という類似的性格をもつ例の存在から、②説は無論考えられる訓であるが、当面の問題歌は二句切れである為、やはりミ語尾との差異は考慮に入れなければならない。このミ語尾の例に対し

(イ) 妹ニ不相久成行而早見奈 (四・七六八)

(ロ) 君爾不相久成宿玉諸之長命之惜雲無 (十二・三六三)

(ハ) 伊毛爾安波受比左思久奈里奴爾芸之河波 (十七・四〇二八)

の三例は、いずれも二句、四句切れであり、発想法も問題歌とよく似ている。しかしこれらの例から、「逢わないで時が経つた」意の表現は、二句に亘つてなされるのが当時の自然な方法ではないかと推察され、アハズヒサシモと、一句中に諸めて区切れとしてしまうには少々無理があると思われる為、②説については一考する必要がある。③説については、アハナクはいうまでもなく、打消「ず」のク語法であり、上代ではク語法が独特な語形成をなしてい

た事は、多くの例の示すところである。集中「ク語法十形容詞」の形は数多く存在するが、因みに推量の助動詞ムノク語法マクの形で考察してみる。

(イ) 妹之光儀乎見卷苦流思母 (二・三二九)

(ロ) 黄葉乃過麻久惜見思共 (八・一五九一)

(ハ) 開卷惜怪夜乎 (九・一六九三)

右はマクの例のほんの一部であるが、形容詞はいずれも、終止形に助詞モヤカモ等が接続して終止しているか、連体形の形で、あるいはミ語尾に接続しているかのどれかであつてマクの例の全てが当てはめられる。この事から推察して言えるのは、アハナクヒサシのように、ク語法に直接ヒサシという形容詞の終止形が接続しているのは一例もないという事である。即ち、

(イ) 山之將黄変見幕下吉 (十・二二〇〇)

(ロ) 可氣麻久母安夜爾加之古志 (十八・四二二)

等の如く、全て助詞モを介しているのである。又、マクのみならず

(イ) 美自可伎伊能知毛乎之家久母奈思 (十五・三七四四)

(ロ) 許許呂爾毛知丑夜須家久母奈之 (十五・三七二三)

(ハ) 家居有君之聞都都追氣奈久毛宇之 (十九・四二〇七)

等の「形容詞の語幹+けい辞のケ+ク」の形又、ナクの例に於いても同じ事が言え、モを介し、例外なく結句に使用されているのである。以上の事から、ク語法+モ+形容詞

の終止形の形は当時の、一般的な構文法と見る事ができ、「不相久」もモを介して、アハナクモヒサシと訓むのが妥当ではあるまいか。その上、不相をアハナクと訓んだ十四例のうち、一句中、不相に形容詞が接続する、

- (イ) 時守之打鳴鼓敷見者辰爾波成不相毛恠(十一・三六四)
 (ロ) 名者告而之乎不相毛恠(十二・三〇七六)
 (ハ) 実登波奈礼留乎阿波奈久毛安夜思(十四・三三六四)
 の三例、又

(ニ) 籠玉五年雖経吾恋無恋不止恠(十一・二三八五)
 の如き例の存在は、前述の結果を一層、確証づけるものだろう。尚、「逢わない状態が久しい時が経つた」意には、二句に亘つての常用表現が存在するように、一句中、しかも結句での表現にはアハナクモヒサシの形が常用構文ではないだろうか。意味上からも、「逢わないで久しい」は、現代感覚でこそ理解される表現であり、当時は「逢わない事が久しい」というのが妥当と思うのである。

(3) シーオモホユの形

集中、慣用句は、種々の形で存在しているが、一オモホユの形も一シノハユ等と同様、一種の慣用的表現といわれている。

そこで集中五十六例にものぼる、一オモホユの形を詳細に分類してみると、(A)は、

- (イ) 前裳今日裳無人所念(七・一四〇六)

- (ロ) 春日野之草花之末乃白露於母保遊(十六・三八一九)
 (ハ) 伊夜思久思久爾伊爾之弊於毛保由(十七・三九八一)
 等の二十六例で、オモホユに接続する品詞はいずれも必ず四音である。即ち、単独母音を含む結句での準不足音が意識的にさけられており、この傾向は次の(B)の形に、

- (イ) 寒暮夕和之所念(一・六四)
 (ロ) 秋田之穗立繁之所念(八・一五六七)

(ハ) 都波良都婆良爾吾家之於母保由(十八・四〇六五)
 の如く見られ、三音の語に強意の助詞シが介される事によって一層明確になろう。

最後の(C)の九例は、どちらにも属されないもので

- (イ) 宇利波米婆藤母意母保由久利波米婆(五・八〇二長歌)
 (ロ) 斑衣服面影吾爾所念未服友(七・一二九六)
 (ハ) 足引之山霍公鳥汝鳴者家有妹常所念(八・一四六九)
 (ニ) 白細布乃袂漬左右二哭四所念(十一・二五一八)
 (ホ) 大夫能許已呂於毛保由(十八・四〇九五) 長歌
 (ヘ) 見者京之大路所念(十九・四一四二)
 (ロ) 中中不見有従相見恋心益念(十一・二三九二)
 (チ) 花耳円穂日乎有者每見益而所念(八・一六二九)
 (リ) 将忘云者益所念(十・二三三七)

に見られる如く、七音の準不足音句のまままで終っている形である。

以上の集中、五十六例の「オモホユ」の形のうち八十パーセント強の四十七例は、(A)(B)に属しているという事実、そして

金野乃美草 苺屋杼 礼里之 鬼道乃 宮子能 借五百磯所念 カリイホソオモホユ

(一・七)

に至つては異例的な破格調九音であるという事実から當時の人々の言語意識が窺われ、その点からも(C)は一考に値するものである。但し、全てを法則の中にあてはめてしまうのは早計で、例えば(イ)は仮名書であり、規制の少ない長歌である為、やはり除外して考えたい。又(ニ)の哭四所念は類似歌、

和芸毛古我蘇 三毛志保々 爾奈伎志曾母波由 ナキソソモハユ (二十・四三七)

の存在から、強意ゾを訓添えた方がより妥当ではないか。同じく(ロ)の吾爾所念も、意味上からやはりソを訓添えたい。残り五例は結局、シを補読した方がよささそうだと思われるもので(ロ)(イ)を「A」、(ハ)を「B」に分けて考察してみる事にする。

「A」 益念について

中中不見有従相見恋心益念(十一・二三九二)

この歌の結句は、古義説イヨヨオモホユを除いて他の註釈書全部がマシテオモホユと訓んでおり、少しの疑問もさしはさまれなかつた訓である。まず益字についてであるが

久利波米波麻斯提斯農波由 マシテシオモホユ (五・八〇二) 長歌

という好例の存在から、又「すつと」続いてきた状態の程度

を強める「意を表わすところから、イヨヨに変えるまでもなく、マシテと訓むのが一首全体の意味に最も沿つていと思うのである。そこで、マシテナシの同じ例は存在しないが、副詞に助詞シがつく例は

(イ) 如是許本名四恋者 イテサシホナシヨロヒバ (四・七二三)

(ロ) 安由能加是伊多ク之布気婆 ヤユネカシイタクノフケバ (十七・四〇〇六)

(ハ) 移夜時自久爾奈保之見我保之 シヨリヨトヨルナホノミワホノ (十八・四一一二)

等、枚挙に遑がなく、もはや一般的なものである。又マシテが、本来は「増す」からの派生語である事を考え合わせると、動詞+接続助詞テナシの例も

(イ) 露霜乃置而之来者 ツキシヨメテシキレシキ (二・一三二)

(ロ) 公之事跡乎自而之将去 キミノコトシヨメテシキレシキ (十九・四二五二)

(ハ) 茂御世爾幸閉奉爾依 シホノミヨニシヨメテシキレシキ (祝詞・大嘗祭)

(ニ) 賢臣能人乎得而志 サキモノノミヤコトヲシヨメテシキレシキ (宣命第四十八詔)

等々、数え切れない程存在し、ほとんど慣用的になつていゝる事等から推して、益念は当然シを補読してマシテシオモホユと訓むべきであると結論づけていいと思う。

「B」 常所念について

足引之山霍公鳥汝鳴者家有妹常所念 タビキノヤマカサキノトウニシヨメテシキレシキ (八・一四六九)

この歌の結句は、諸註釈書から、常字にはまず問題はなないが、所念については、オモフの訓に対し、注釈は、準不足音句は結句の例外になるとシノフ説をとつていゝ。しかし所念という言葉の上からばかりでなく字面からも同

様に考えるべきであつて、集中は勿論、古事記、祝詞、祝詞、宣命に於いても、

(イ) 吾心恒ニ念ニ自レ虚翔行。(記・中)

(ロ) 使者ハ遣止^{佐年}所レ念行間ニ(祝詞・遣唐使二時奉幣)

(ハ) 斯地者無物止念部流仁聞眉(宣命第十二詔)

の如く、念は専らオモフ意の表記にのみ使用され、シノフ意には到底考えられないのである。故に―オモホユの慣用句の多くの例が示すように、所念はオモホユと訓むべきなのである。そこで、副詞ツネニは前述のマシテの場合と同じ理由から、又、名詞十助詞ニの形が副詞化した例

(イ) 大宮人毛越乞爾思自仁四有者(六・九二〇)

(ロ) 真素鏡直ニ四妹乎不相見者(十一・二六三三)

(ハ) 吾待之代者曾無面爾之不有者(十六・三八一〇)

等の存在から当然、常所念にシを補説してツネニシオモホユとすべきである事は自明の理であろう。

さて諸註釈書のほとんどが、イヘナルイモシと訓んでいる第四句は、結句のシの補説によつて少なからず気になるところである。

旧訓ではその他に①イヘニアルイモと、②イヘナルイモラ^{イヘニアルイモシ}の二説があるが、①説については

(イ) 伊弊爾安流伊毛之於母比我奈思母(十五、三六八六)

(ロ) 比奈爾安流和礼乎(十七・三九四九)

等の例がある。しかし皆、仮名書の巻であり、之乎我等の

助詞の表記によつて八音になつてゐるのである。とすれば①説に何らかの助詞を施訓しても、結局、結句も八音である為、当時の歌の格調の重視という面からさけるべきだと思われる。次に②説だが、オモホユの言葉自体のもつ意から、ヲの補説は語法的に可笑しく、ヲナシオモホユの形が皆無である事実からも妥当でない。但し、

(イ) 家有人毛待恋奴濫(四・六五一)

(ロ) 在家妹之待将間多米(六・九七六)

(ハ) 伊弊奈流伊毛爾安比呂許麻之乎(十五・三六七一)

(ニ) 伊波奈流伊毛波佐夜爾美毛可母(二十・四四二三)

等の例の如く、イヘナルイモ十助詞という形が考えられるところから何らかの助詞を施す事が出来ると言える。そこでヲ・ニは、意味上、語法上無理であり、ガに於いては、下のオモホユにかかるガの用例は一例もない。

結局、かかつていく用言との結合を強めるハが考えられ、ハ：オモホユの形四例のうち、

鴨之羽我比爾霜零而寒暮夕和之所念(一・六四)

の如くハの補説例が一例にしろ存在し、

宇流波之等安我毛布伎美波思久思久於毛保由(十七・三九七四)の様、ツネニの意と類似するシクシクが、

アガモフキミハと四、結句を成している事実は、イヘナルイモハとツネニシオモホユとの結びつきを一層強くするものだと言え、ここはガよりハの方がより妥当な訓だと思ふ。

そして、同じく問題にした「大路所思」もこれらの観点からオホヂシオモホユと訓むべきも自明の理と言える。

(三)

以上、訓添え、改訓によつていくつかの問題にふれてきたが、いわゆる上代人の、言葉の表現に対する意識は非常に強く、助詞・助動詞一つにしろ、当時の構文法に従つて無理なく、扱われていたと言える。そしてそれらは、歌を表記する場合の用字意識にもつながり、表現法、用字法等がともに把握されて、当時の人々の理解の基となつていた事は言うまでもない。モ一カモヤモ一カ等の呼応關係に於ける一方の表記省略、又、ク語法に見られる種々の慣用句、そして準不足音句が問題の中心となる：シオモホユ等の統一された表現法、等特に上代に於ける助詞シは文中で一種の係結び的役割を果していると考えられ、ネノミシナカユ。イメニシミユル等の慣用句の多い事からも領づけるのではあるまいか。

要するにこれから上代の表現法は、種々の形で把握されており、上代人の言語に対する意識の中に確実に反映していた事が分るのである。

平家物語序章の研究

丸 山 千 鶴 子

(一) 序

「平家物語」といえば、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」の書き出しをすぐに思い出す程、それは我々の間に親しまれた書き出しである。そしてこの序章は「平家物語」を貫いている諸行無常の仏教哲理を表現し、又「灌頂卷」の厭離穢土、欣求淨土なる経生思想と照応していると考えられてきた。しかしその常識化された考えが果して正鵠を得たものであるか、又序章の表現はそれのみに終つているのか等と、(一)、序章の解釈とその典拠、(二)、無常觀について、(三)、方丈記の序章との比較、(四)、平家物語における序章の意義、等の方面から研究して、序章の持つ意義について改めて考えて見たいと思う。

(二) 本 論

(1)、序章の解釈とその典拠

「平家物語」序章の部分は、現在残つている平家諸本の代表的なものと比較してみても、さしあたり本文的には問題のない文章である。よつて覚一本系統の龍谷大学図書館所蔵の平家物語を底本とする「日本古典文学大系33」によつて研究していく。

その主な大意は、人が諸行無常盛者必衰の道理に抗し得な